

民鉄文化の伝承と発信

[民営鉄道の博物館・資料館 — その使命と役割 —]

都市交通としての
地下鉄を
アカデミックに伝える。

日本では珍しい地下鉄に特化した「地下鉄博物館」は、帝都高速度交通営団時代の公益事業として1986年に開設され、現在は、東京地下鉄グループの公益財団法人メトロ文化財団が運営している。1927年に日本で初めて開業して以来、都市交通として重要な役割を果たしてきた地下鉄の歴史と技術を、アカデミック性とアミューズメント性の両面から伝え続けている。

地下鉄博物館の賀山弘之館長にお話を伺った。

文●茶木 環 撮影●織本知之



公益財団法人メトロ文化財団 常務理事
地下鉄博物館 館長

賀山弘之
Hiroyuki KAYAMA

日本の地下鉄の歴史を伝える

——開館から30年以上の歴史をお持ちです。まず開館の経緯から教えてくださいませんか。

賀山 地下鉄博物館の運営主体である公益財団法人メトロ文化財団（当初は財団法人地下鉄互助会）は1983年3月、公益事業の一層の充実、拡大を図るとともに公益事業の柱とするため、地下鉄博物館の建設を計画、「地下鉄に関する資料収集班」を結成し、資料収集や保存などの準備を開始しま

した。

当時の帝都高速度交通営団の全面的な協力を得て、85年に建設着工し、86年7月12日、営団地下鉄東西線葛西駅の高架下にて、日本初の地下鉄博物館を開館しました。2016年に開館30周年を迎えています。

——地下鉄博物館は博物館法に基づき博物館として登録されています。

賀山 博物館法に基づく博物館として1987年4月に登録され、また前年の86年には財団法人日本博物館協会、全国科学博物館協議会、東京都博物館

協議会に加盟しています。開館以来の入館者数も順調に推移して、2009年には300万人、16年には400万人を達成しました。

日本博物館協会では、年に1回、全国博物館館長会議を開催していますが、そうした交流の中でいつも改めて考えさせられるのは「博物館としての使命は何か」ということです。地下鉄博物館として、地下鉄に関するものを漠然と展示するのではなく、その時々テーマをより明確にして来館者に伝えていくべきだと思っています。

——そうしたお考えのもと、展示方法の見直しもされていますね。

賀山 東西線橋脚の耐震補強工事に合わせて、博物館の建物や展示物の改装を行い、03年にリニューアルオープンしました。展示内容としての大きな変化は、丸ノ内線300形第1号車を入れたことです。開館時から展示している日本で最初の地下鉄車両（現在の銀座線）1001号車については、車内を常設公開していましたが、重要文化財の指定を受け、特別日を設けて公開するようになりました。これらの車両の

ファンは多く、年配の方が車両を前にお孫さんに昔のことをお話しする光景も時おり見かけます。博物館の展示内容に加えて、来館者によって生きた歴史がそこで語られる。こうした点から、も実車展示がより意義深いものとなりました。

リニューアルにより、従前に加えて「遊び」「体験」の要素を取り入れ、地下鉄が都市生活の中でどのような役割を担っているのか、どのようにして動いているのか、そしてどのように守られているのかなどを、「みて、ふれて、動かして理解する」コンセプトの参加型博物館となりました。

——館内ではどのような展示をされていますか。

賀山 公益財団法人が運営しているということで、東京メトロだけではなく、他都市も含めた日本の地下鉄の歴史や技術の紹介をするなど、幅広く展示しています。もちろん東京メトロ関連の資料が多くを占めますが、東京メトロを例として地下鉄を考えるような展示を常に心掛けています。

そしてアカデミック性を重視するようになっています。先ほど申し上げた日本最初の地下鉄車両となる東京地下鉄道の1001号車と丸ノ内線301号車、東京地下鉄道とともに今日の銀座線をつくった東京高速鉄道の最初の車両129号車などの実車展示により、日本の地下鉄の成り立ちや発展の歴史を直に学ぶことができます。1001

号車や129号車、それにターンスタイルの自動改札機など当館の五つの展示物は近代化産業遺産に指定されており、1001号車は昨年9月、国の重要文化財にも指定されました。

約90年前、地下鉄の父とも言われる早川徳次が、地下に安全に車両を走らせるために奔走し、つくった地下鉄を、現代に受け継ぎ、「文化財」としていかに守り有効に活かしていくかが、当館の使命であると考えています。

——歴史を体感できるというのは大きな意義がありますね。

賀山 博物館法に基づく当館は、歴史博物館と位置付けられています。歴史博物館として展示物の充実を図っていかねばならないんです。来館者の年齢層は幅広いですし、訪日外国人の来館者も増え、多言語での対応が必要になっていきます。多様な来館者に対して、十分に対応し得る充実した展示、解説をしていきたいと思っています。

建設と安全の技術を知る

——歴史の伝承の一方で、「地下鉄をつくる」や「地下鉄をまもる」コーナーでは、通常の鉄道利用では見えない部分に光が当てられています。

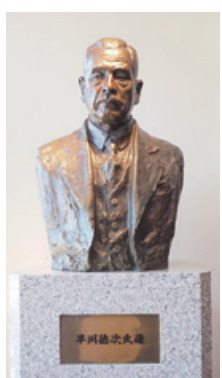
賀山 04年に営団地下鉄が民営化され、13号線（現・副都心線）の建設も終了したことから、50有余年におよぶ地下鉄建設の記念碑として13号線シ-

ールドマシンカッターディスクを常設展示する計画を立て、06年に実現しました。直径が6・8m、重量が18トンもあるもので搬入には苦心しましたが、地下鉄建設のダイナミックさを象徴する展示だと思っています。併せてどのように地下鉄をつくっているのか、3Dシアーの立体的な映像でご理解いただけます。

また、「地下鉄をまもる」コーナーのトンネル内部に設置されている施設展示では、地下鉄の安全がどのようにして担保されているか、よくお分かりいただけると思います。

——運転シミュレーターなど体験型の施設も充実していますね。

賀山 展示については、アカデミック性とともにもう一つ重要視しているのが「アミューズメント性」です。「地下鉄ブレイランド」では電車を運転できるシミュレーターが人気を呼んでいます。「メトロパノラマ」では東京の地下をどのように電車が走っているのか、ご覧いただけますし、「ミニジオラマ」では来館者の方にも車両を動かしていただけます。



す。さらに総合指令所体験もできますので、さまざまな面から鉄道の仕事を知っていただきたいと思います。

地下鉄の背景を伝える特別展

——常設展示とは異なる切り口で、特別展も開催されていますね。

賀山 「地下鉄建設工法の変遷展」や「車両技術の変遷展」、「丸ノ内線全通50周年」や「東西線開業と沿線地域発展の軌跡展」など、常設展示の補完的な意味合いと詳細な歴史について理解を深めていただくため、年に3回、特



特別展「地下鉄開通90周年展」では創業者である早川徳次ゆかりの品々を公開した。



踏切音が鳴り、床面ステッカーも貼り付け、飛び出し注意を促す。来館者の「安全確保」を細やかに配慮する。

別展を開催しています。

17年12月30日に日本の地下鉄が開通90周年を迎えたことから、12月2日から翌18年1月28日までの間は、「地下鉄開通90周年展」を開催しました。東京の地下に夢を求めて、創業者の早川徳次が何を実現していったか。その思いの強さを展示で伝えたくかったですね。私自身も山梨のご実家に足を運んでさまざまな資料をお借りしてきました。

——地下鉄が発達していった背景となる社会の動き、また携わった人々を知ること、より総合的に理解が深まります。

賀山 そうです。地下鉄が社会の中で交通インフラとしてどのような役割を果たしてきたか。その時代はどういう時代だったか。そして、人々はどんな苦労をしながら達成してきたのか。常設展においても「地下鉄のあゆみ」を歴史年表とともに展示していますが、テーマ性の高い特別展を開催して、より詳細な歴史を伝え続けていくこと

は、まさに当館の大きな使命であると考えています。

学芸員資格の教育実習受け入れも

——先程お話しになられた博物館法に基づく博物館としての活動についてはいかがでしょうか。

賀山 05年から近郊の中学校の要請にお応えして、職場体験学習を受け入れれています。また地方の中学校が修学旅行の一環として行うグループ見学では、学芸員が付いて解説し、教育実習活動に協力しています。また、1989年からは、学芸員の資格取得のための博物館実習の受け入れを行っており、2017年までに42大学、173人を受け入れました。

——海外からの視察も多いのですか。

賀山 ええ。特に東南アジアなどの新興国において、わが国の最先端の鉄道技術に関心が高まっています。当館では、日本の地下鉄についての知識、技術を視察できます。外国の行政や鉄道関係者の訪問者に対しては、積極的な受け入れと対応を心掛けており、昨年もありました。

——博物館以外での活動については、どのようなことをされていますか。

賀山 財団の業務である交通文化事業として、メトロコンサートの開催や映画の上映、小学生を対象にした絵画展、写真や文学などの作品を展示する

メトロ文化展などを当館で実施しています。

また、交通マナーや地下鉄の知識を身に付けてもらうことを目的に、小学生を対象に「鉄道教室」を実施しています。東京メトロの協力を得て、駅を見学し、運転士や車掌の仕事を見た後、地下鉄博物館で説明を受ける内容です。さらに地域支援活動の一環としては、講義を行う出張セミナーや資料の貸し出しなども行っています。

最近では、葛西警察署を中心とする葛西地区のテロ対策ネットワークにも参画しています。文化財防火デーでは、葛西消防署が当館の1001号車が重要文化財であることから、火炎瓶が投げられたという想定で訓練を実施するなど、地域とのつながりも着実に強まっています。

——今後の課題としては、どのようなことがありますか。

賀山 やはり地下鉄博物館の認知度アップです。地下鉄イベントに参加している人でも、博物館の存在を知らない方が多い。PR用のポスターやチラシを制作したり、ホームページ（HP）、ツイッターを開設するなど、広報伝活動に取り組んでいます。最近では、SNSなどで存在を知ったという訪日外国人も多く、情報発信に力を入れていきます。

また、インバウンド対応としては、展示物に英語と日本語の解説を付け、部分的には音声ガイドを入れている

ますが、これをさらに多言語化したいと考えています。HPは、英語と中国語の繁体字・簡体字、韓国語で閲覧できるようにしています。

実は04年にマスコットキャラクター「ぎんちゃん」「まるちゃん」を制作し、15年には着ぐるみをつくり、認知されるようにイメージソングもつくりました。館内の定時放送で流し、イベントなどでも使用しています。

——誰にでも利用しやすいことを目指すのは鉄道に共通していますね。

賀山 そうですね。常に「博物館としての使命は何か」を考えながら、現状維持に甘んじることなく、展示内容や展示方法に工夫を凝らし、来館者が楽しんで学べる施設でありたいと思っています。

また、当館にはさまざまな収蔵資料があり、例えば鉄道用具機器なら改札鉄や乗車券集改札ボックス、運転士靴やブレイキハンドル、合図灯など多岐にわたっています。そのほかにも乗車券や制服、視聴覚資料など、日本の地下鉄の歴史を網羅するあらゆる資料が揃っています。資料や画像の一部は、「メトロアーカイブ」としてHPで公開していますが、当館に在籍する5人の学芸員は、鉄道事業者とはまた異なる視点で「鉄道文化」に焦点を当てることができず。収蔵資料を活用した特別展など当館ならではの企画を立て、より充実した博物館活動を行っていきたくと考えています。

地下鉄博物館

1986年に開館した日本で初めての地下鉄博物館。懐かしい地下鉄車両の展示や本物の運転台を使った運転体験など、さまざまな展示を通して、地下鉄の歴史から最新の技術まで「みて、ふれて、動かして」学習できる参加型ミュージアムとなっている。日本と世界の地下鉄についても展示があり、なじみのない国内外の都市の地下鉄事情についても分かるようになっている。

2



東京都江戸川区東葛西 6-3-1

- 最寄り駅 東京メトロ東西線 葛西駅（葛西駅高架下）
- 開館時間 10:00～17:00（入館は16:30まで）
- 休館日 毎週月曜日（祝休日の場合は翌日）・年末年始
- 入館料 4歳から中学生100円、大人210円

地下鉄をつくる



地下空間の立体模型や副都心線の建設で使用した実物の「シールドマシンカッターディスク」も展示。

地下鉄をまわる



日々安全に走るために行われている取り組みを紹介。トンネル内の施設物等も紹介している。



日本最初の地下鉄車両1001号車（現在の銀座線）と、丸ノ内線301号車が営業当時のままの姿で展示されている。



1001号車は国の重要文化財に指定されている。特別公開日に限り、車内に入ることも可能（HP参照）。



開業当初、使用されていたターンスタイルの自動改札機（再現品）。右は、1929年頃につくられたトンネル側壁の一部。

地下鉄車両のしくみ



車両の仕組みや原理を学ぶコーナー。車両のドアの開け閉めやパンタグラフの操作などを体験できる。

メトロパノラマは、模型電車が走り、東京の地下にどのように電車が走っているかを知ることができる。

地下鉄プレイランド



運転シミュレーターがある人気のコーナー。千代田線電車運転シミュレーターでは、本物と同じ動揺装置付きの運転台で運転を体験できる。

